
我が家は妖異だんらん

シンシヨク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家は妖異だんらん

【Nコード】

N8031L

【作者名】

シンシヨク

【あらすじ】

とある住宅地にある一軒の家、家の中には当然、風呂があり、台所があれば住人である家族がいる。

穏やかな家族だんらんな場所がそこにある。

住人は人間ではないが家族である。異種妖怪の家族である。

これはそんな家族の日常を書き記した物語である。

ある夏のだんらん風景

ジリジリ熱気が降り注ぐ真夏の暑い日に俺、時間ヨウキ（ジハザマ ヨウキ）はまったくやることがないという理由で家の中で、グダーッと寝転んでいた。まあ、やることがないと言ったがあるといえば、現在夏休みなので学校の宿題をするなり、あまりにやる気がない部活に参加したり、家事をするなどといった例があげられるのだが、今俺は久し振りの平和を味わっているので、何もしたくはなかった。

久し振りの平和。

普通の人から見れば、疑問に思う言葉だろう。

この現代に自分が平和でない日のほうがどう考えても少ないはずなのだが、俺の場合はこの、半年いろいろな複雑かつ厄介トラブルに巻き込まれてしまった。平和なのが嬉しいくらいに。思い返してみると始まったのが、ちょうど1月の初旬だった。父さんの勝手な手のせいで、妖怪が家族代わりになってしまった。あの日。今となってはすっかり慣れて楽しく過ごしているのだが、今日にいたるまでたくさんの、現実離れた体験をしてきた。

図書館に住み着いていた妖怪。

学校を館に変えようとした奴。

生き霊の集まった商店街。

人間ではない通り魔。

今まで起こったことに一番印象をつけて一文に訳すこんな感じだ。自分で、今までやってきたことを上げるのは何かと馬鹿に思えてくるし、しかも自分1人の手柄ではないのでそんなふうに言える義理もない。家族の助けがあつてこそ解決できたことだ。もちろん、家

族というのは妖怪のこと。そのため俺が感謝と信頼をとことんしている人間の家族に負けるとも劣らない信頼で時間家の妖怪ファミリーはできている。

？

「ヨウちゃん。ただいま」

玄関から、幼い声が甲高く家中にチャイムのごとく響き渡った。そしてドタバタと軽快な足音が近づいてきた。その声と足音の主は俺を見つけるなり、テンション変えず寝ている俺を上から覗き込んできた。

？

「ヨウちゃん。暑さにやられちゃったみたいだね。」

？

「違うよ。きつとやることなくて、寝てるだけだよ」

帰ってきて早々、家の持ち主に軽くひどいことを言うちっちゃい女の子2人が俺を上から見下ろしていた。

ヨウキ

「それが、留守番してた人という言葉かよ。まあ、本当のことだが強く言わないけど。で、どうだった？市民プールは。」

？

「お水が微妙にぬるくて美味しかったよね」

？

「ね。」

「……と、とりあえずプールを堪能してきたようだった。しかし軽い問題発言ではないかと思った。プールの水を飲んでしまうのは分からなくはないが。」

ヨウキ

「（楽しそうにそう言われると、若干怖いな。プールの水を飲んでも害はないが。）」

とりあえずこのテンションが高い二人について説明しよう。片方の先に俺に話しかけてきたのが、『白姫』（ハクヒメ）といい白いワンピースを着ている。もう一人は、『黒椿』（クロツバキ）と言う名前で白姫とは対象的な黒いワンピース（？）を着ている。

二人は時間家の家族代わりのメンバーで妖怪ファミリーの仲間である。ちなみにこの二人は『古椿』という妖怪の使い、つまり花である。とにかくこう、テンションの高い椿である。ちなみにこの二人は高確率で厄介なトラブルを持ち込む、ちょっとした悩みの種である。まあそれは今は、置いて、その二人は市民プールから遊びに行つて帰ってきたところである。その二人はというと、俺との会話をえたのち台所の冷蔵庫目当てに走っていた。

白姫

「ねえヨウちゃん水がないよ」

台所から声が響いてきた。

ヨウキ

「水？水なら水道水でいいだろ、ジュースが目当てじゃないのか」

黒椿

「今日は、容器の冷えた水がいいの」

ヨウキ

「あいにくとペットボトルの水は品切れ中だ。鍛冶流が帰ってくるまで我慢しろ。」

白姫

「ヨウちゃんのイジワル」

黒椿

「イジワル」

無いものにイジワルと言われてもどうしようもない。こんな理不尽な2人に相手をしていると玄関が開く音が聞こえた。

？

「ただいま、帰りました。」

その声を聞いたとたん、白姫と黒椿はパタパタと玄関に駆けて行った。その後を俺もゆっくりおい玄関に向かった。

玄関にいくると、白姫と黒椿がただただ一つの透明な液体をがぶ飲みしていた。

白姫

「ふー。やっぱり山の水が一番美味しいね。クロ。」

黒椿

「でもちよつと少ないね。ハク。」

この2人はまずお礼をするということを知らないらしいが、ここで気にしても仕方ない。

一応言うことだけ言っておくことにした。

ヨウキ

「せっかく暑いなか買ってきてくれたのに、少ないとか言うな。」

そう言うと、黒と白は少し膨れっ面のような顔で一瞬俺を見て、水を飲みながら家の奥に走っていった。

ヨウキ

「まったく・・・」

？

「まあまあ。礼儀も家の中では大目に見ましょう。私達家族なんですから。」さつき買い物から帰ってきた、家族の一員が言った。勿論妖怪であるがすぐく人間に近い妖怪だと初めて会った時から思っている。名前は、鍛冶流かじながれという。ちなみに何の妖怪かは本人も分からないのだとか。

ヨウキ

「まあ確かにな。俺、指導とか分からないからな。」

そう愚痴ると鍛冶流が答えた。

鍛冶流

「大丈夫です。指導しようとは思わず自然に毎日を過ごしていけばそのうち身についていきますよ。」

そう言って鍛冶流はフォローしてくれた。

ヨウキ

「まあ、そうかもな。有難な鍛冶。」

俺が反応すると、鍛冶は笑顔で答えた。

鍛冶流

「いいえ。あ、この買ったものの冷蔵庫に入れてきますね。」

ヨウキ

「ああ。たのむ。」

そう言って、鍛冶は買物袋を持ってキッチンに向かって行った。

玄関に一人になった俺は、さっきの鍛冶の言葉で少し引掛かるところがあった。

ヨウキ

「（そういえば、鍛冶は「過すごしていけば身につく。」ってさっき言っただけ。よくよく考えてみると白と黒の年齢って・・・）」

俺の歳は17だが、妖怪は年齢と老いるのは比例しない。どんな少女の姿をしていても俺より年上の方が多い。

ヨウキ

「そう考えてみると、さっきの言葉は説得力に欠けてくるな。」

白と黒の先行きが一層不安になってきた。そう思うと自然に肩が重くなるような感覚に襲われた。

ヨウキ

「・・・って何か、物が乗ってるみたいな重さなんだけど。」

俺はおもむろに自分の右肩を見た。すると

？

「にゃ」

俺の肩の上には、見た目はちょっと小太りな三毛猫みたいなのが乗っていた。

？

「にゃ」

何がうれしいのかよく分からないが、肩凝りになりたくないのので俺は肩から降ろすことにした。

ヨウキ

「ほら、降りろ。尺弄り」

俺がしゃがむと、肩から飛び降り居間の方に歩いていった。

あいつは尺弄り（しゃくいじり）と言って見たかんじ猫だが、すね

こすりという妖怪である。一応断っておくが、ペットという認識ではない。みんな対等なのだ。

俺も玄関の廊下に立っているのは疲れたので、居間に向かうことにした。

ヨウキ

「ふー。もう一度休むとするか。」

白姫

「まーてー！」

ドタバタという音とともにキッチンから、大声が聞こえてきた。俺はしばらく休めそうにない予感がした。

キッチンに入って、現状を確認することにした。まあなんとなく根源は分かっているのだが。

白姫

「またどっか行っちゃった〜。」

白姫がイライラしたおもむちでキッチンにいた。

ヨウキ

「一体どうしたんだ。白姫。」

白姫

「あ、ヨウちゃん。蓮蓮が、蓮蓮が。」

ヨウキ

「あー、分かった。またいつものことだろ。まったく懲りないな。」

いつものことなので、対処は簡単だ。ただ何処にいるかが・・・

黒椿

「一つ言っておくけど、いつもみたいに、潰したらダメだよ。相手はハクの水だから。」

横から、黒が空のペットボトルを持って俺にそう言ってきた。

ヨウキ

「え？白の水・・・」

そう俺が黒に聞き返すと、2人は無言で数回頷いた。

ヨウキ

「やつかいな物に取り次いでくれたな。よりもよって水なんかに、蓮蓮の奴。」

白姫

「やつかいなものなんかじゃないよ。ハクの今一番、大事なものだよ。」

若干失言だったな。まあとりあえず蓮蓮を探すほうが先決。

ヨウキ

「見つけだして、叩く！」

白姫

「叩いちゃだめー！ハクの。」

ヨウキ

「本気にするなって。言葉のあやだ。」

さて、話しが進まないのので探すことにしよう。何処から探したら良

いか考えることにした。やっぱりここは全員で。

ヨウキ

「黒、鍛冶は何処言っただ。」

俺は人手を増やすため、鍛冶流に手伝わってもらうという結論をだした

黒椿

「鍛冶君？鍛冶君ならあそこにいるよ。」

黒は自分の後ろに指を指した。黒の後ろは廊下にでる入口があるのだが、

鍛冶流

「待ちなさい。蓮蓮。」

廊下には右に左に走り回る、水の入ったペットボトルと、それを追いかける鍛冶流がいた。

この光景を普通の人が見たら、度合いは違えど間違いなく驚くだろう。何せペットボトルと見た目大学生くらいの青年が走り回っているのだから。

とりあえず事態を収拾することにした。

ヨウキ

「鍛冶、一旦やめろ。捕まえるにも取り付いてるのがあれじゃあ、追いかけてまわしても無理だ。」

鍛冶流

「ヨウキさん。ではどうしましょう?」

ヨウキ

「まず俺の考えた作戦でやってみよう。白と黒も協力してくれ。」

俺はキッチンにいる2人にも話しかけた。

黒椿 & 白姫

「「いいよ。」」

白姫

「それで、どうするの?」

白姫が具体内容を聞いてきた。俺はみんなを一箇所にまとめて作戦を話した。

ヨウキ

「よし。みんな決めたところに行ってくれ。あ、あと鍛冶。」

鍛冶流

「何か?」

俺は鍛冶を呼んだ。一つ抜けていることがあったから。

ヨウキ

「多分、居間の隅あたりに尺弄りがいるから見つけたらさー」
鍛冶流

「協力させるんですね。分かりました。」

俺がすべて言うより、鍛冶は先読みして事を理解したみたいだった。そして居間に向かった。

ヨウキ

「よし、俺もやるぞ」

作戦決行開始。

命名「蓮蓮危機一発作戦」

先程この名前を言ったら、軽くみんなから一蹴されたのもう言わないようにしよう。

白姫、黒椿、鍛冶流、尺弄り、そして俺。みんな決められた場所に蓮蓮に見つからないように隠れているので、居間、台所、廊下など、まあ結局は家の中全域が静寂につつまれていた。そしてしばらくすると、

？

「・・・??」

階段の脇あたりから、水の入ったペットボトルが低空浮遊のような感じで出て来た。出方は恐る恐るでくるくる回転しているので、あたりを見回しているようだ。

ヨウキ

「（よし！まずはおびき出し成功。）」

続いての段階に入る。

ペットボトル（蓮蓮）はあたりを未だ見渡しつつ居間の方向に進行中。

俺は鍛冶達に次の段階に移るように指示する。

ヨウキ

「（よし居間に入ったな。）鍛冶、尺弄り、いまだ!!」

？

「――!!」

ペットボトル（蓮蓮）が俺の声で自分の来た方向に戻ろうとする。
だが、

ボタン！

居間と廊下をつなぐ戸が閉められた。閉めたのは鍛冶流。作戦通りに事を運んでくれている。

鍛冶流

「蓮蓮。ここは通しませんよ。」

その言葉に、少し後ずさりをし今度は台所に向かおうとする。しかし

尺弄り

「にゃー!!」

台所に向かうほうには尺弄り。「にゃー」と言っているが威嚇体制（多分）でバリケードを張っている。

？

「――!!?」

逃げ道を塞がれた^{ペットボトル}蓮蓮が居間の中央に戻っていく。

次は俺の出番である。

俺は台所を通り居間に入る。

ヨウキ

「さあ、蓮蓮。そろそろ観念しろよ。」

そう言いながら俺は捕まる体勢でじりじりと近寄っていく。すると、

ピュー

？

「――！」

ベットボトル

蓮蓮が居間にある大きなカーテンの方に素早く逃げた。
だが、これは計算の内。

ヨウキ

「白、黒、いまだ。」

カーテンの両脇から白と黒が現れ、両カーテンの端を握った。

白姫&黒椿

「蓮蓮。これで決まりだよ！」

蓮蓮

「――？？」

自信満々に言う二人に対して蓮蓮は理解してないようだ。
そして、カーテンが勢いよく開かれる。すると、

蓮蓮

「――！？！？」

ヨウキ

「よし、作戦成功。って思ってたより眩しい上に暑い！」

開け放たれたカーテンが意味するもの。

夏、窓、昼間、そして西向きという単語が並べば分かるだろう。かんかに差し込む日差しがあたり蓮蓮は苦しんでいる感じた。そして、

パタ。

ペットボトルが力無く倒れた。そしてペットボトルから青白い塊が勢いよく飛び出し、居間の壁にくっついた。すると、

ピク。ピク。ピク。

壁に無数の目が現れた。

かなり紹介が遅くなったがこの無数の目が家族の一人。蓮蓮れんれんという目目連という妖怪である。

ヨウキ

「まったく、もう懲りたか蓮蓮。こんな事はもう無しにしてくれ。」

蓮蓮

「――」

喋ることができないがおそらく頷いているのだろう。しかしそれは確実に俺の言ったことは守ってくれないということに等しい。またこんな事があるだろう。

ヨウキ

「気が重くなるな・・・。」

白姫

「ハクの水。」

白姫がさっきまで蓮蓮が憑依していた、水の入ったペットボトルを回収している。

何にしても一段落ついた。

白姫

「ヨウちゃん。」

白姫が俺を呼んだ。もうすんだのに何だ？

白姫

「ぬるくて美味しくない。」

なるほど。確かに当然のことだ。あれだけ動き回った揚句、西日に当てられれば冷たさなんかとうに無くなってしまふ。

ヨウキ

「そう言われてもな。とりあえず氷と割って飲むしかないな。」

それが無難な策だ。しかし

白姫

「氷は嫌い。」

古椿という妖怪であり花であるため、水は好むが冷たすぎる物は苦

手なのだ。

どうしたものか・・・

グゥ。

ふと俺の腹の虫が鳴る音が聞こえた。そういえば少し疲れたのか、小腹がすいていた。

ヨウキ

「なあ、なんか軽いもの食べないか。ちょっとお腹すいたし。」

鍛冶流

「いいですけど、何を食べます？」

こう暑いときに食べたいものといえば一つだ。ついでにこれで白姫の不満も解決する。

ヨウキ

「そうめん作ろう。それなら白も黒も水に不満はないだろ？」

白姫&黒椿

「うん。」「」

二人が同意すると、鍛冶流が率先して

鍛冶流

「じゃあ作るので待っててください。」

と言ったが

ヨウキ

「さて鍛冶。」

俺はそれを止めた。ささいな提案をするために。

ヨウキ

「せっかくだからみんなで作ろう。その方が短時間でできる。」

鍛冶流

「分かりました。では始めましょう。」

ヨウキ

「よし、白と黒は麵出して、葱を切ってくれ。」

白姫＆黒椿

「「分かったよ。」」

ヨウキ

「鍛冶と尺弄りは鍋頼む。」

鍛冶流

尺弄り

「はい。」 「にゃ」

ヨウキ

「さてこれで・・・?」

何か足りないことに気づいた。まだ蓮蓮は壁に留まったままだである。

ヨウキ

「蓮蓮。」

蓮蓮

「――！」

ヨウキ

「食器運ぶの手伝ってくれ。」

蓮蓮

「――」

蓮蓮は嬉しそうに、こっちに向かってきた。蓮蓮の憑依能力はこういうときに役に立つ。

ヨウキ

「よし始めるぞ。」

蓮蓮

「――」

俺と蓮蓮は台所に入って行く。そうめんは簡単だがやはり料理はみんなで作ったほうが美味しくなるのだ。そんなとある些細な日の風景である。

今までいろいろなことがあったのもあれば、ただ何も無かったこともあった。これからもそんな日が続いていくのだろう。

でもどんなことがあると、我が家は家族だんらんであり、『我が家は妖異だんらん』なのだ。

ある夏のだんらん風景（後書き）

今回の話は、中日談といいますが、話数をつけるとするならば5話と言ったところです。

という訳で、次から頑張って1話から5話を書いていこうと思います。（ネタだけはあるので）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8031/>

我が家は妖異だんらん

2010年10月8日23時36分発行